資料翻刻2

椎名麟三講演メモ②

教会での講演風景、年月日・詳細不詳

【資料概要】

資料番号124163《椎名麟三講演メモ11》
資料番号124164《椎名麟三講演メモ12》
資料番号124165《椎名麟三講演メモ13》
資料番号124167《椎名麟三講演メモ15》
資料番号124168《椎名麟三講演メモ16》
資料番号124169《椎名麟三講演メモ17》
資料番号124170《椎名麟三講演メモ18》
資料番号124171《椎名麟三講演メモ19》
資料番号124172《椎名麟三講演メモ20》
資料番号124173《椎名麟三講演メモ21》
資料番号124174《椎名麟三講演メモ22》
資料番号124175《椎名麟三講演メモ23》
資料番号124176《椎名麟三講演メモ24》
資料番号124177《椎名麟三講演メモ25》
資料番号124178《椎名麟三講演メモ26》

いずれもノート紙、縦書、鉛筆書、一部ペン書、一部赤鉛筆
大坪經子氏寄贈（平成27年度）
＊資料番号124166《椎名麟三講演メモ14》については、「信仰と実作」（『椎名麟三全集20　評論7』冬樹社、1977年）と同内容のため、翻刻掲載せず。

当館収蔵の椎名麟三資料は、椎名麟三の長男・大坪一裕氏（故人）が所有していたもので、一裕氏が亡くなった後、夫人の經子氏に引き継がれたものである。椎名麟三資料の多くは郷里の姫路文学館に収蔵されているが、生活の拠点であり、亡くなった地でもある世田谷にも資料を納めたいという一裕氏の遺志により、270点の資料が当館に寄贈された。

寄贈資料のうち、講演メモは34点。草稿など椎名麟三の直筆資料の多くに共通するのが、切り離したノート紙の罫線上に細やかな文字で書かれているという点である。講演メモの特徴としては、口述する内容のまま記しており、椎名が講演に際して入念な準備を行っていたことがうかがえる。『椎名麟三全集　全23巻別巻』（冬樹社、1970〜79年）収録の年譜に拠れば、作家デビュー翌年の1948年5月の松本中学校（現・長野県松本深志高等学校）と慶応義塾大学の講演会をはじめとして、以後、全国各所で講演を行っている。特に、1950年12月の洗礼後からは、キリスト教の文学者として教会や集会での講演が目立つ。

講演メモのほとんどが全集に未収録のものである。椎名自身による削除・裁断やページの欠落が多いため、前後の内容がつながらない箇所もあるが、そのまま掲載した。

【凡例】
■漢字の旧字体は新字にあらためた
■仮名　表記通り（ほぼ旧仮名）
■数字・記号　表記通り
■削除・追記部分については級数を下げ、かつ削除・追記した内容を［削除　●●●●］［追記　●●●●］のように表記した。ページが欠落していると思われるものについては［以下ページ欠落］のように表記した。冒頭が欠けているものも多いがとくに表記はしていない
■註は適宜。但し本誌上巻に入れた事項、人物は省略した
■文中には今日の人権意識に照らして不適切な表現があるが、原文を尊重してそのまま記載した

資料翻刻2

椎名麟三講演メモ②

椎名麟三講演メモ11

1960年頃［推定］、ノート紙4枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［1枚目］

［削除　そして小説入門書などを読みあさつて勉強しはじめたのですが、どれもこれもまちがつているように見える。たとえば、朝起きて顔を洗つて、朝御飯を食べて、会社へでかけたというようなことを書いてはいけないというようないろんな禁止事項がある。だが、朝起きなければ、第一、会社へ行けなけなければ、学校へも行けないわけでしよう。顔を洗わなければあなた方の場合は、お父さんやお母さんに叱られるでしよう。御飯を食べなければ、午前中の授業を受けていても、お昼のお弁当のことばかり頭にちらついて、授業にも身に入らないでしよう。会社へ行つたとか学校へいつたとかいうことも大切なことで、たとえば会社へ行かなければ、給料はもらえないし、学校へ行かなければ、卒業できるかどうかわからない。また、それらの小説の書き方の入門書では、卒業できるかどうかわからない。また、それらの小説の書き方の入門書では、「お早う」なんて挨拶は、小説では不必要なことで書いてはいけないというんです。ところが「お早う」という言葉は大切なことで、それをいわなければ、あいつはどうかしているとか、威張つているとかいわれて、人間関係がうまく行かない。会社みたいなところでは、首になりかねない。私の娘は、高校三年を卒業して、どういう理由でか、蓼科高原の小屋にただ一人でこもつています。むろん冬の間もずつとです。その娘が高校にいるとき、「お早う」ぐらいは、たとえ親に対していつた方がいいのじやないかな、と忠告したことがあります。するとその翌朝、私はぎよつとさせられました。突然、私の後から怒つた声で「オス」といわれたからです。私は、心臓が弱いので、シヨツクを受けさせられるのは困るので、朝の挨拶は取り下げにしてもらいました。―とにかく私たちの日常生活で、習慣的となつているようなことは書くな、とどの入門書では禁止しているんですね。しかしそれらの事柄というものは、人間が生きて行く上において大切なことなんですね。で、戦後、最初発表した「深夜の酒宴」では、わざとのように、朝起きて、顔を洗つたりというようなことや、「お早うございます」や、一つのことを繰り返してはいけないというような禁止をおかして、わざと、むやみやたらに繰返しました。ある批評家は、繰り返しが何十あると数え立てて、私を非難しました。しかしその小説は、当時の文学に対して、シヨツクをあたえたことだけは事実であつたようであります。］

だから小説を書きはじめた私にここで困ったことが私に起りました。「この世のなかには、ほんとうの自由も、ほんとうの救いもない」ということを書いているのですから、自分の書いた作品から自分へ問いがはねかえつて来るのです。ほんとうの自由も、ほんとうの救いもないのなら、この世のなかは、生きて行く意味がない。生きて行く意味がないならば、

［2枚目］

［追記　だから、ほんとの自由もほんとうの救いもないとして小説を書きはじめたのでありますが、しかしこのようなほんとうの自由を意味するほんとうの救いはないのでしようか。「ない」として…］

だから当然小説を書くという意味もない。つまり何故死んでしまわないのか、という問いが跳ねかえつて来るわけなのであります。弱りましたね。自殺できないということは、実験済なんですからね。だからその問いから逃れるために作品を書く。しかし「この世には、ほんとうの自由も救いもない」ということを書いているわけですから、同じような問い、じや、何故死なないのかという問いがはねかえつて来る。そればかりではないんです。世間では「日本でただ一人の実存主義作家」というレツテルをはつてくれたのは、まだいいのでありますが、「絶望の作家」というありがたいレツテルもはられました。しかしその絶望の作家は、たしかにこの世のなかに絶望していることは事実なんでありますけれど、絶望しながら、食糧事情がまだよくないときなのに、死ぬどころか飯を三杯も五杯も食べているんですね。この自分の状態を実に情ないと思いながらです。そしてとうとう行づまつてしまつたのであります。仕方なく、毎日、文士たちがよく集る新宿あたりで飲んだくれておりました。たとえ一時間でもいい、そんな問題なんか忘れてしまいたかつたからであります。そのころ太宰治*さんという作家の心中事件があつて間もないころでしたので、そんな私の姿を見た文士たちは、今度自殺するのは、椎名麟三だろうと大きな期待をかけてくれていました。しかしその声を耳にしましても、たしかにみじめな気持でしたが、死ぬこともできないので、一層みじめでした。その私にとつて、一るののぞみというものがなかつたわけではないのであります。ドストエーフスキイ*から教えられた、イエス・キリストの名であり、その名のなかに私の求めているほんとうの自由があり、ほんとうの救いがあるような気がしていたのであります。

［削除　だが、先程からも申し上げていますように、私は、自分自身を唯物的に教育して参りました。あの共産党員として活躍中は、反宗教同盟にも加つていました。宗教の起源についても、モルガン*などの古代社会の研究から知つていました。そんな男に、どうして神が信じられたり、イエス・キリストが信じられたりするでしよう。そして信じられなかつたにもかかわらず、そのころ友人であつた牧師さんに洗礼をしてもらいました。どうしてそんなことができたのでしよう。信じられないままに、自分自身全体をイエス・キリストにまかしてしまつたのであります。一種の自殺だといえるかも知れません。この問題は、質問でもありましたら、くわしく申し上げたいと思います。信じられないままに、ほんとうの自由、ほんとうの救いを意味するものへ自分自身をまかせることによつて、信じられる者となつたということだけは申し上げられると思うのであります。］

＊太宰治　小説家。１９４８年6月13日に玉川上水で心中自殺を遂げた

＊ドストエーフスキイ　フョードル・ドストエフスキー。ロシアの小説家。椎名は『悪霊』を読んだことが「私の眼を文学へひらいてくれた」（『私のドストエフスキー体験』）と述べている

＊モルガン　ルイス・ヘンリー・モーガン。アメリカの文化人類学者

［3枚目］

ここで、みなさん方と、多少むつかしいかも知れませんが、ほんとう自由、ほんとうの救いということを一緒に考えたいと思います。［削除　修養会ということですから、］多少むつかしいことを考えてもいいと思うからであります。

さて、自由ということはどういうことでしよう。みなさんも、ふだんそれをおつかいになつているのではないかと思います。おかあさんから、もつと勉強しなさいといわれて、「わたしの自由よ、放つておいて」とおつしやるんじやないでしようか。しかしそのときの自由というのは、どんな意味でおつかいになつているのでしよう。「わたしの勝手よ、放つといて」という意味でありましよう。たしかに自由とは、「自分の勝手にする」という側面もふくんでいます。そしてそれは大切なことであります。だが、自由は、他の側面もふくんでいる。私は、電車に乗つて、よくあなた方ぐらいの年頃の方に会うことがあります。一人でぽつんと入口のドアなんかにもたれていらつしやる方がある。そのときのその人は、まるで大哲学者でもあるような深刻な顔をしていらつしやる。または、実にこの世のなかはつまらないといつた顔をしていらつしやる方もあります。みなさん方も電車にでも乗つたとき、乗客の人々の顔を観察してごらんなさい。一人でいる人の方は、みんな悪くいえば死んだような、または、化物のような顔をしていますよ。むろん私だつて、そんな顔をしているのにちがいないんです。ところがお友達が、二、三人乗つていらつしやるとき、その人の顔が突然かわります。手品でもつかつたんじやないかと思われるほどであります。急にまるでほんとうの自由にでも出会つたように、生々とし、楽しそうなお喋りがはじまります。これを人々とともにある自由と呼べるでありましよう。「私の勝手よ」というときの自由は、いわば個人的なものです。だから孤独なものだといえると思うのです。だが、人々とともにある自由は、それと反対のものです。孤独から救い出された自由なのであるからであります。これを大きくひろげると、個人的な自由と社会的な自由、あるいは孤独の自由と全体の自由ということになつて来るのであります。

みなさん方は、この二つの矛盾した自由を生きていらつしやるわけであります。朝、おかあさんに叱られたときは、急に孤独の自由のなかにとじこもる。だが、学校へ行つたときは、人々とともにある自由を楽しんでいらつしやる。逆にまた人々と一緒にある自由のなかにいるときは、何とかそれから逃れて孤独になりたいと思い、孤独にあるときは、人々のなかへ行きたくて、用もないのにふらりと友達をたずねたりなさりたくな

［4枚目］

つたことはありませんか。一日のうちに、何十回も、この二つの自由との間にうろうろしていらつしやる方もある。学校へ行つて、教室で人々と一緒に勉強していて、九時三十分ごろになると、何だか勉強していることがつまらなくなつてひとりになつてしまう。そうなると、その世界の人々がみんなつまらなく見えて来るもので、先生は、あんなに一生懸命にしやべつているが、ほんとは何も知つてはいやしないんだとか、A子さんはやつぱり点とり虫だ、あんなつまらない話を一生懸命にノートをとつているとか、B子さんは、先刻からあくびばかりしているとか、C子さんは、何故へんな髪ばかり結つて来るんだろう、ほんとにバカらしいとか、つまり何も彼も否定的に見えて来る。ところがお昼の時間になつて、バレー・ボールなんかみんなと楽しんでいるときは、校庭の隅っこで、みんなからはなれて本でも読んでいる人を見ると、「なんだ深刻

ぶつて、おかしな人」というように孤独を楽しんでいる人が否定的に見える。家へかえつたら家へ帰つたで、やはり同じようなことが起る。何か気に入らないことがあると、急に孤独になつてしまう。お父さん、お母さんはじめ、兄妹たちも気に入らない。それどころか、すべてが否定的に見える。お父さんは、夕刊を読むのに、わざわざ寝転んで読まなくてもいいだろう、とか、おかあさんは、ほんとになつちやいない。お父さんが何をいおうと、「はい、はい」いつている。あんなの、封建的な奴隷というんだわとか、姉さんは、学校もできないくせに威張つている。あんな姉さんをお嫁にもらつた男の人はきつと苦労するにちがいないとか、弟や妹もテレビばかりにかじりついている、何が面白いんだろうか、というふうに思われる。最後には、家全体が否定的に見えて、「何てつまらない家なんだろう」と家全体がつまらなくなる。そればかりか、「わたしは一体何のために生きているんだろう」というような深刻な問題を背負つてしまう方もでて来るわけなのであります。

さて、これらのことは、何をあらわしているかと考えますと、私たちは、この根本的に矛盾するどちらの自由にも、ほんとうの意味で生きることはできないということをあらわしていると思うのであります。ここに現代に生きる人々のなやみがあり、またそのなやみからの自由が、現代の要求だと申し上げてもいいと思うのであります。新聞を読まれる方は、あのフルシチヨフ*さんの二つの自由の平和共存という言葉をお読みになつたことがあると思いますが、そんなむつかしい政治の問題でなくても、中学を出て働いている若い女子工員さんの書いたものを（それは北海道でありますけれど）それらを集めた文集を見たこともあります。それらの文章にあらわれている意見のなかで、不思議に多い意見にぶつかつたのであります。「それは組合には全的に献身しなければならない。といつて自分自身の自由を失つてはならない」という言葉に要約されるものが多いのです。ここでは、

［以下ページ欠落］

＊フルシチヨフ　ニキータ・フルシチョフ。ソビエト連邦の政治家。１９５３～64年までソ連の最高指導者。冷戦下で社会主義国と資本主義国との平和共存を主張した

椎名麟三講演メモ12

年月日不明、ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆書

［1枚目］

1．孤独について

私は、医学的方面から、「健康なからだ」について語る資格をもつていません。私自身が心臓に欠陥をもつているはなはだ情ない人間であるからであります。だが、現代の医学は、精神が肉体の健康にどんなふかい関係をもつているかを知つておりますように、心のもち方で病気になつたり、なつたりすることは事実であります。また、セリエ博士*のストレス学説のように、あらゆる病気をストレスから説明する人もあらわれて参りました。そのストレスのなかには、精神的なストレスもふくまれていることはいうまでもありません。また、あるお医者さんは、現代病として、ノイローゼをあげています。この病気は、申し上げるまでもなく、人間の精神状態にふかい関係をもつているものであります。で、今日私がここでお話しできることは、精神衛生という観点から、人間の精神の問題にふれてみたいと、そう思うわけであります。

ところで、精神的なストレスだとか、ノイローゼだかというものは、喜びにあふれた愉快な精神状態からやつて来るものではないということはいうまでもないでありましよう。喜びにあふれた精神状態とは反対のもの、不幸だとか絶望とか［削除　孤独とか］いうものからであることは、見やすい道理であります。しかし不幸だとか絶望だとかいう感情は、私たちにとつては、終始起る感情であつて、いわば私たちは、朝の八時ごろ、子供の教育のことで御主人と一寸した喧嘩をなさつて、少しばかり不幸になり、少しばかり御主人や自分のことなどに絶望なさる。だが、十一時ごろになると、少しばかり幸福になつていらつしやる。気晴らしのために、デパートへ買物に出かけて、安い掘出物のブラウスを手に入れることができたからです。だが、午後一時には、また少しばかり不幸になつていらつしやる。その掘出物のブラウスを隣りのおくさんに見せたところが、あまり感心したような顔をしてくれなかつたからです。つまり私たちは、少しばかり不幸になつたり、少しばかり幸福になつたりしながら、毎日を暮しているといつていいでありましよう。このように不幸だとか、絶望だとが、日常性の範囲を超えないうちは、健康であり、無事である精神状態だといえましよう。不幸や絶望というものは、本来の性質として、日常性の枠を超えるという性質をもつているのであります。私は、デパートで一つの場面に出くわしたのであります。若いB・G*の方が、気に入ったいいセーターを見つける。ところが、お小づかいが足りなくてそのセーターが買えない。デパートでは、給料日までそのセーターを予約しておくことはできない。で、急いで家へかえつて、御兄弟の方か御両親にお金をかりて、デパートを引き返して来る。ところが、その売場の前へ行つて、ぎよつとして立止る。そのセーターがなかつたからです。女店員さんにきくと、売れてしまつたという。そのときその発らつとしたB・Gさんは、思わずこういつているのです。「いやになつてしまつたわ、死んでしまいたくなつたわ」といつているのであります。

＊セリエ博士　ハンス・セリエ。カナダの生理学者

＊B・G　ビジネス・ガールの略

［2枚目］

むろん、その若い女の方は、死にやしないでありましよう。それなのに、何故死んでしまいたいというような言葉を口走るのでしよう。それは、私たちの精神構造がそのような運命をになつていると申し上げてもいいと思います。私たちは、たしかにこの世における何かについて不幸になつたり絶望したりするわけでありますけれども、その不幸や絶望はすぐ、自分自身全体、あるいは世のなか全体に対する不幸や絶望につながつているのであります。そしてほんとに自分の不幸や絶望を感じた人は、当然孤独であります。逆に申し上げますと、人間は、本来的な意味で、孤独であるから、不幸になつたり絶望したりすることができるのだと申し上げてもいいと思うのであります。このごろ新聞や雑誌で問題になつている現代人の疎外感というものも、言葉がかわつているだけで、孤独という言葉と同じであり、現代生活にひろくひろがつている感情を問題にしているわけなのであります。

それでは、人間は、何故本来的な意味で、孤独なのでしよう。先ず人間の自己についての意識の発生は、孤独という形でやつて来るからであります。

○池の話。

それでは、なぜ孤独が恐しいのか。それは「魂における死」にほかならないからであります。その死においては、世界全体が意味を失つてし

まうと申し上げていいのであります。いいかえれば、そのとき自分自身が生きてはいない、死んでいるも同様だと感じられていると申し上げてもいいと思います。

［3枚目］

このような状態が、長くつづくと、肉体的なストレスをあたえ、ノイローゼになるということはいうまでもありません。そのような自分自身を救つてやらなければ、とにかく衛生上わるいということは、たしかであります。それでは、どう救うのか。みなさんと、一つの小説をモデルにして一緒に考えてみたいと思います。

それは簡単な筋の小説であります。あるとき、［削除　Aという］男と女が出会つて愛し合うようになる。だが男の方はなかなか結婚へふみ切れない。

［4枚目］

だが、今日は、文学の話をしようとしているのではありませんから、これでとどめますが、要するに、いろんな救い方があるが、それを大きく区別すると、主観主義的な救い方と客観主義的な救い方の二つがあると知つておいていただければいいと思います。しかしこの二つの救い方に共通していることは、自分の不幸や絶望を絶対化しないことということにつきると思うのであります。買いたいと思つていたブラウスが他人に買われてしまつていてなくなつていても、「いやになつたわ」はいいのですが、「死んでしまいたい」というように死をもち出すことによつて、いやになつたということを絶対化しないことであります。つまり絶対的なものと考えないこと、それが大切だと思うのであります。いいかえますと、人間にとつて死は、絶対的なものであると同時に、過度なもの、度をすぎたものなのであります。人間の生の歴史の向うにあるものであるからであります。この度をすぎるということは、人間にこわばりを起し、痙攣を起させます。（おやまの話）そしてこわばりや痙攣こそ、精神の衛生にとつて、まことによくないものなのであります。私は、座右の銘に「善にすぐるも悪である」という言葉をおいています。たとえ、いいことでも、度がすぎると悪となるという意味であります。そしてこのことは、精神の健康にとつても大切なことだと思つているのであります。

だが、ひるがえつて見ますと、私たちは、死をもち出すことによつて、自分を絶対化していることが多いのであります。

［5枚目］

御自分で、それができない方は、愛だとか宗教などのたすけを借りることもいいでありましよう。とにかく、死は人間にとつて逃れがたいものでありますが、自分の不幸や絶望を死をもち出すことによつて絶対化しないこと、つまり自分の不幸や絶望を過度な、度のすぎたものにしないこと、それが精神衛生上にとつてきわめて大切だということを今日申し上げたのであります。御清聴ありがとうございました。

椎名麟三講演メモ13

年月日不明、ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆書

［1枚目］

それらの孤独には、理由というものがないというのが、そのふかさを示していると申し上げていいと思います。たしかに私たちは、何かについて孤独になるのでありますが、しかし孤独となつたときは、この世界全体からの孤独を感じているのだと申し上げていいと思います。「一体自分は何のために生きているんだろう」という呟きは、その呟き自身が答えになつているのであつて、「ほんとうの意味で生きてはいない、つまり死んでいるも同然だ」という答えが、その呟きの背後にあると申し上げていいでしよう。そしてその答えのなかには、理由のない人間存在のほんとうの姿が、いいかえれば、私の生きて行くほんとうの根つこのないという事実が、あらわれているのであります。そしてこのほんとうの根つこのないところに、ほんとうの人間の生き方は、生れて来ない、したがつてまたほんとうの文学も生れて来ないということが、今日の私の話の眼目なのであります。というのは、文学というものは、徹頭徹尾人間を問題にするものであるからであります。

今日ここへ来て下さつている方々のうちには、信仰者ではあるが、文学なんて全く縁がないという方もいらつしやるでしようし、また逆に文学には関心があるが、信仰なんて苦手だという方もいらつしやるだろうと思います。だから「信仰と文学」の関係を語る上に、私のような口下手な人間が、果して説得力をもつことができるかどうか、自分自身でも不安なのであります。それでは最初に世界の若い人々に、何が問題となつているかを、小説や演劇や映画などを通じて、考えて見たいと思うのであります。と申しますのは、若い人々ほど、問題の所在といつたものを鋭敏に感じ、それを反映しているものはないと申し上げてもいいと思うからであります。

［2枚目］

「何から救い、何から救われるのか」ということによつて自由というものの性質がちがつて来る。したがつてその自由に根拠をおく人生観や、世界観などもわかるのであります。

世界の若い人々の訴えというものは、先程も申し上げましたように、そのどんな自由も生きるに値しないというところに、この世界に対する怒りやいら立ちがあるということが申し上げられます。その彼等に何が求められているのか。いうまでもなくほんとうの自由であることはいうまでもありません。だからしたがつて、文学の主題となるところのものは、人間の自由であり、それ以外にはあり得ないのであります。笹森先生のお読み下さつた聖句は、そのことを正しく示して下さつていると申し上げていいといつていいのであります。ホントウの自由は、先程も申し上げましたように、この世の光となるものであります。そしてその光がなくては、この世の生きるホントウの意味を失つてしまう。地の塩さえ、その味を失つてしまうところのものなのであります。

大抵の場合、私たちの生きられるのは、このあたりをゴマ化して生きていると申し上げていいと思います。

人々とともに一緒に仕事したり、あるいは遊んでいるとき、突然私たちは、孤独の自由をあこがれる。悲しいとき、淋しいとき、苦しいとき、あるいはつまらないとき、私たちは、人々と共に生きている場所から逃れたいと思います。だが、孤独の自由のなかにいるときは、逆にまた人が恋しくなる。そのために、用事もないのに友達をたずねたり、人々の集つている場所に行つたりするわけであります。会社へ行つている人は、会社へ行つているときは、会社の人間関係なんかにつまずいたとき、あるいは仕事そのものに意味を失つてしまつたとき、早くひとりになりたいと思う。ところが会社を休んだりしていると、人々と一緒に働いている、あの人々と一緒に生きるあの生活に自分の自由があるように思われて来る。一日のうちに、たとえば朝の七時ごろには、人々と一緒に生きる自由を求めている。会社へ出て、午後の三時ぐらいになれば、孤独の

自由にあこがれて、一分も早くひとりになりたいと願つているわけであります。

しかし文学となりますと、どちらかの人間の自由を根拠にしなければならない。そのことは、先程光源のところで申し上げた通りであります。だから一つの小説を読むと、その人が、どんな自由に生きているかがわかるのであります。いいかえますと、文学は、（演劇や、ラジオやテレビのドラマや、うたや映画までをふくめて）、その人が→

［以下ページ欠落］

［3枚目］

たしかに一つの組織、一つの団体へ入れば、この孤独は克服されたような感じがするのであります。そこでは、いつも何らかの全体が問題となる。自分の自由というものをいわば組織のもつている自由にあずけてしまうわけで、ある意味では、自分というものは、単なる組織の歯車にすぎないと感ずる場合も出て来るのであります。あのナチスのアイヒマン*の答弁をお読みになつた方があるでしよう。彼は、アウシュビツツの虐殺の責任はない、ただ、上の命令を実行する機械にすぎなかつたと答えているのであります。組織全体においては、個人の自由は失われるということを彼はそういつているわけであります。

いずれにしましても、孤独の自由も不幸でありますが、人々とともにある自由も不幸であります。先程名前をあげましたサルトル*は、さらに決定的に表現して、人間の自由は呪われているといつています。誰から呪われているのかということが問題になるでありましようが、しかし彼は、誰からの誰についてはふれていません。ここではつきりするのは、どちらの自由にも、ほんとうの意味で生きることができない、あの怒れる世界の若者たちのいら立ちが、はつきりするわけであります。そして現代に生きる人間である以上、このいら立ちに応える責任はあるわけなのであります。怒れる若者たちに対してでなくとも、少くとも、私たち一人一人の生き方のなかにある矛盾や絶望に対して責任をとつてやらなければ、自分自身がかわいそうではないでしようか。

*アイヒマン　アドルフ・アイヒマン。ナチス・ドイツの親衛隊将校。ナチスによるユダヤ虐殺の責任者として、1960年にイスラエルの裁判で死刑を言い渡された

*サルトル　ジャン＝ポール・サルトル。フランスの哲学者、戯曲家、小説家

椎名麟三講演メモ　15

1959年頃［推定］、ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［1枚目］

［削除］ところが、その自殺は、滑稽なこととなり、死なないのであります。「子供は、睡眠薬というものを知らないのね」と映画の主人公の情婦から軽蔑される。それほど彼等は無邪気だつたのであります。もちろんこの無邪気さこそは、おそるべきものがある。いわばこの少年少女のような一切の世界に対する無関心とでもいうべき無邪気さのなかに、この若いフランスの映画監督にこの現代がいかに受けとられているかが、はつきり示されていると思われるのであります。それは、現代における希望のなさであり、そこから由来するところの徹底的な不毛なのであります。あの死の砂漠のような何一つそこから生れて来ない荒涼とした状況のなかにあることを彼等は、端的に示していると考えられるのであります。

そして今日、私のいいたいことは、自分自身がそのような絶望であるということのできるクリスチアンが、ひとりもいないだろうということなのであります。クリスチアンは、何等かの意味で、それぞれすくわれていると思つている。しかしホントはすくわれていないのだということを、人間やこの若者たちの怒りへの同感において、はつきり知つているかどうだろうかということなのであります。］

私たちは、共産圏のポーランドの作家、フラスコ*の「週の第八の日」に、ポーランドの若者たちの怒りを感じます。私は、このような絶望的な小説を、いま読もうとは思いがけもしませんでした。そこには、水一滴もない乾き切つた世界の状況と云つたものが、その作品からひしひし感じられて来るのであります。と云つて、そこには何か重要な物語が書いてあるわけではないのであります。大学生の若い女が、主人公になつていて、それに恋人がいる。その二人は、貧乏で、一緒に寝ることのできる部屋をもつことができない。小説の冒頭は、［2字分空白］のなかで、男が主人公に肉体を求めるところからはじまつている。女主人公は、それを拒絶する。こんなところでなく、ちやんとした部屋のなかでというのが、その理由であります。で、男は、友達の借りている部屋を、数時間だけ借りようとするが、うまく行かない。そのことで今度は、女の方で、積極的になり、どこででもいいということになる。すると今度は、男の方がためらう。彼女は、そのことで腹を立てて、妻のある行きずりの男に、自分をあたえてしまう。それだけの小説であります。だが、小説においては、書かれたものが、いつも重大ではないのです。何故なら、この小説は、この日本ならどこにもころがつているような物語を描きながら、もつと別のことを、すでにもう人間に関するすべてが終つてしまつたことを告げているからなのであります。人間にとつての未来がすつかり失われてしまつたことを、怒りをもつて語つているのであります。

*フラスコ　マレク・フラスコ。ポーランドの作家、脚本家

［2枚目］

しかしその女子大生は敬虔なカトリーク信者のうちの娘なのでありますが、その両親に対して、反宗教的な見地から反抗するというような気配すら見せていない。そしてこのことは、第一次大戦後の絶望の時代とはちがつた、危険な質を示していると思うのであります。あの大正の第一次大戦後においては、シエトフ*の不安の哲学が流行したり、デカダンスが起つておりました。しかし一方、人間に対する強壮剤のように、マルクス主義が私たちに希望をあたえてくれました。ホントウの未来がやつてくれば、私たちのいまなやんでいる一切は、消えてしまうのだと教えてくれたわけなのであります。もちろんシエストフの不安なんか、資本主義体制の生んだ歪んだ意識だというわけだつたのであります。だからもちろん、宗教に対しても攻撃的でありました。ところが、この二三年にわだつて、私たちの耳目にふれてくるものは、○むしろ宗教に対する絶望なのであり、そのような絶望より生じる徹底的な無関心なのであります。それは、宗教なんかブルジョアの愚民政策の一つなのだから撲滅せよ、という、いわば宗教追放なのではなく、それよりもつと根のふかいものなのであります。いわばそれは宗教というものをとつくに向うへ超えた、「神はない」という現実を現実として、そこから生れて来る怒りだと云つていいと思うのであります。

同じポーランドの映画で、最近「灰とダイヤモンド」*が封切りになりました。上原教会で、赤岩さん*が、この映画のことについてお話しになつたそうでありますが、私は、休んでいて、残念ながら聞いていないのであります。しかし私は、この映画においても、ポーランドの若者から、つまりワイダという監督から、私たちが、どんな状況のなかに生きているかを思い知らされたので［1字分空白］ります。

○梗概（あらすじ）

明らかにこの映画には、三つも四つもの問題が感じられるわけであります。第一には、この話が示している通り、独軍の占領下に育つて独軍に対して抵抗して来た若い人々、それから歴史的な転換期であつた終戦後の混乱とその苦悩のなかにおかれた人々、そして何よりもまず、この映画をつくつた現代の若い人々の心のなかに秘められている暗い孤独と絶望の感情なのであります。しかもその暗い孤独と絶望というものが、教会やキリストの像によつてしか表現され得ないものであるという点なのであります。

いま、荒筋で申し上げましたように、最初のシーンは、教会の前なのであります。しかしこの教会の前というのは、単なる場所的な設定なのではない。いわばポーランドの若い世代を代表する監督のワイダは、この映画全体を教会を前におこうとしていると云つていい。しかも単に映画的な効果としてそうしているのではない。「怒りをもつて」彼はそうするのであります。彼は、そのために

[以下ページ欠落]

*シエトフ　レフ・シェストフ。ロシアの哲学者

*「灰とダイヤモンド」　イエジー・アンジェウスキー原作、アンジェイ・ワイダ監督のポーランド映画。1959年日本公開

*赤岩さん　赤岩栄。牧師。椎名麟三は上原教会で赤岩より洗礼を受けた

椎名麟三講演メモ　16

1963年6月5日、ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆書

同志社大学チャペル・アッセンブリー・アワーでの講演「現代の非人間性」

[1枚目]

要約しますと、人間の自由は、客観的な全体的な自由と、主観的な個人的な自由とに大きく区別できるということなのであります。ここで困つたことは、この二つの自由は、おたがいに矛盾し合うということなのであります。しかしさらに困つたことは、どちらの自由をすてても、そこに非人間化が起るということなのであります。

このことは、戦争中の合言葉であつた「滅私奉公」という考えを考えて見てもわかると思います。「私」というものを滅して公に奉ずると書きますが、戦争中その生き方が、日本人としてほんとうの生き方であるといわれたものなのであります。しかしその生き方が、どんな片輪の生き方であり、非人間的な生き方であるか、戦後痛烈な批判をあびたことは、みなさんも御承知のことと思います。といつて、今度は、逆に「公」の方を滅して、「私」に奉ずるといつた生き方、「おれはおれだ」とか、ドストエフスキイ流にいえば、「おれがお茶一杯のめれば、世界なんか滅んでもいい」という公を無視して個人的な自由に生きる生き方も、非人間的な生き方であるということは、申すまでもないことと思います。いいかえますと、この矛盾した二つの自由をどちらも捨象し無視することなしに、その二つの自由を共に生かすこと、このことのなかに現代の運命が賭けられていると申し上げていいのではないかと思うのであります。事実、この二つの自由の共存ということは、まさに現代の希望であり、現代の要求であると申し上げることができると思うのであります。

話の規模を大きくすれば、あのフルシチョフさんの世界に対する要求のなかにも端的にあらわれているものであります。いうまでもなく、二つの自由の平和共存の要求であります。むろんマルキシズムの純理論の上からはまちがいだと批判することもできるでありましよう。しかし一

方の抹殺は、人類の破滅という、はなはだ壮大すぎる非人間化を導く戦争なしにはなし得ないということは現実なのであります。このような現実のなかにある私たちにとつては、フルシチョフさんの平和共存は、実に魅力的であるだけでなく、現代の要求だといえるでしよう。しかしここにまた困つたことが起るのであつて、その平和共存を成立させることのできる根拠を欠いているということなのであります。もしソビエトの自由が、その共存の根拠となることは、ケネデイ*さんが承知なさらないでしよう。しかし逆にアメリカの自由がその共存の根拠となることは、それをいい出している当のフルシチヨフさんが承知

*ケネディ　ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ。アメリカの第三十五代大統領

[2枚目]

なさらないでしよう。しかしアメリカのよつて立つている資本主義的な自由と、ソビエトのよつて立つている共産主義的な自由は、全ておたがいに質がちがう以上、統一なんかあり得ない。ただ、共存だけが可能なのでありますが、そのためには、それを成立させる根拠が、提出されなければならない。しかしそれがまだないということが現実だといつていいと思うのであります。

しかしこの現代の希望、この現代の要求にこたえるべく、多くの哲学者や思想家や文学者が、それぞれの答えを出しています。たとえば、哲学では、最近なくなられた田辺元*さんが、「実存と愛と実践」のなかでその試みをしておられますし、また、フランスの実存主義は、この課題を全面的に引き受けようとしています。しかし若い世代の間では、この現実に対して敏感であつて、アメリカのビート族*は、禅のなかにその解決を見出そうとしていますし、フランスのアンチ・テアトル*やアンチ・ロマン派*は、その答えに絶望的であるにしろ、ないにしろ、この問題に関係をもたずにはいられないのであります。去年でしたか、倉橋由美子*が、フランスのビユートル*から盗作したといつて、江藤淳*と論議したことがありましたが、そのビユートルは、「私」と「彼」とを共存させる方法として、「あなた」を小説の主格として設定したのであります。それはどこかに書きましたように文学理論の上ではあやまりなのでありますが、その試みのなかに現代のこの時代の要求の鮮やかな反映を感ぜずにはいられないのであります。その意味で、私は、このビユトールの試みを高く評価したいとそう思つているのであります。それでなくても、この対立し矛盾する個人的な自由と全体的な自由との共存の要求というものは、私たちの生活のなかの現実としてあるものなのであります。

四、五年前になりますが、私は、北海道の女子工員さんのお書きになつたものを集めた文集を人に見せてもらつたことがあります。中学を出てまだ間のない方々のお書きになつたものでありますが、そのページをめくつているうちに、私は強いショツクを感じたのであります。それは同じような意見の多いのに気付いたからですが、その意見を要約しますと、「わたしたちは組合に全的に献身しなければならない。といつて個人の自由を失つてはならない」ということであつたからであります。現代の人間の要求をこれほど端的に表現されたものは、見たこともなかつたからであります。しかしある決定的な局面

*田辺元　哲学者

*ビート族　戦後、アメリカを中心にあらわれた、現代の常識から外れ、無軌道な行動をする若者たち。ビートニク

*アンチ・テアトル　戦後のフランスにあらわれた前衛劇。ヌーボー・テアトルとも

*アンチ・ロマン派　戦後のフランスにあらわれた前衛的な小説群。ヌーボー・ロ

マンとも

＊倉橋由美子　小説家

＊ビュートル　ミシェル・ビュトール。フランスの小説家

＊江藤淳　文芸評論家

［3枚目］

に立たされると、この人間として全くもつともな要求というものは、破れないではいられないということはみなさんにもおわかりになると思うのであります。ということは、おそらくみなさん方は、その労働生活のなかで経験していらつしやることだろうと思われるからであります。自分の社会的な自由を保障してくれる組合へ全的に献身するか、それとも組合なんかとは無関係に自分の個人的な自由に生きるかというように、何らかの形でその選択をせまられたことがおありであるだろうと思われるからであります。しかしその二つの自由を、どちらも消し去らないで生かしてくれるものがありさえすれば、それこそはほんとうの自由というものでありましよう。それでなくても政治的な、あるいは社会的実践のなかに起るところのあの燃えるような孤独を知つていらつしやる方は、このような共存が何を意味するか、よく知つていらつしやると思うのであります。

今日、お話ししたかつたことは、実に単純なことなのであります。現代の希望として、さらには現代の要求としてあるところの二つの自由の共存は、もつとも人間的なものであり、さらに人間にとつて根本的なものであるということなのであります。しかしそれに対する答えはないということによつて、現代はこの非人間的な状況のなかで苦しまされているということなのであります。そしてこの非人間的な状況から救い出し得ないならば、その思想がどんなに立派なものであつても、またその宗教がどんな深遠なものであつても、少くとも現代に対する適応性をもつてはいないだろうということであります。むろんキリスト教もその例外ではありません。ここらあたりで伝統のある同志社の宗教部あたりの奮起をのぞみたいとそう思うのであります。これで私の下手な話は、一応終りたいとそう思います。ありがとうございました。

椎名麟三講演メモ17

年月日不明、ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［1枚目］

［削除　刑務所の裏門から放り出されてからは、特高の監視を受けているために生活に困りながらも、もつぱら実存哲学の本を読んで来ました。未決で知つたニーチエ＊をはじめとして、ケルケゴール＊だとか、ベルグソン＊だとか、ヤスパース＊やハイデツガー＊などであります。その私は、小説は、私のいだいている要求に対して何の答え、ママ　ももつていないと思われたのであります。しかしそれらの本を読んでも何の答えも自分には得られなかつたのであります。その私にはつきりわかつたことは、ほんとうの救いもほんとうの自由も人間の手のなかにはないということであります。無関心なうちはいいが、一たびほんとうのものを手のなかにとらえようとしたとき、人間にはないのでありますから、暗い空虚を感ぜずにはいられないのであります。私が、拷問や未決で陥つた空虚の正体は、実はそのような事情から来ていたのであります。

○小説を書く動機―ドストエフスキイと私。「ほんとうの自由も救いもないが、助けてくれと叫んでも差支えない」ということ。］○「深夜の酒宴」どうして死なないか。

私は、そのことを知つたとき、全く絶望してしまいました。「赤い孤独者」という小説を書いてからであります。当時、新宿にゴミゴミした飲み屋街がありそこで飲んだくれていました。考えなければいいんだ、そう考えたからであります。当時、新宿の駅前に都電が通つていたころですが、そのレールの間に倒れたまま起き上れなかつたことさえあります。向うから電車のヘツドライトが、近付いて来るのですが、バクダンという悪い酒に腰をとられていて、つまり腰を抜かしてしまつたように立上れない。一体、どうなるんだろうと思つていました。しかし、終点に近いので、電車が徐行していたおかげに助かつたのであります。そのころは、太宰治さんが心中という派手な仕方で自殺したところでしたが、そんな私を見て、文士の仲間たちは、今度自殺するのは、椎名麟三だろうと期待していてくれたのであります。しかし私は、自殺はしないだろうと思つていました。自殺できないことは、すでに実験ずみであつたからであります。

全くほんとうの救いやほんとうの自由をもつていないかぎり、日常生活においてもまた社会的な実践においても、生々と生きて行くことはできないということは、もう説明する必要もな［削除　く、みなさま方にもおわかりになつていただ］ことだろうと思います。この私にとつて、イエス・キリストの十字架によつて、そのほんとうの救いがあたえられているということを知つたときは、大きなショツクでありました。

＊ニーチェ　フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ。ドイツの哲学者。椎名は獄中で『この人を見よ』を読み、転向を表明

＊ケルケゴール　セーレン・キルケゴール。デンマークの哲学者

＊ベルグソン　アンリ・ベルクソン。フランスの哲学者

＊ヤスパース　カール・ヤスパース。ドイツの哲学者

＊ハイデツガー　マルティン・ハイデッガー。ドイツの哲学者

［2枚目］

キリストを信じて

［削除　学問的な話に入りましたから、少しばかり私自身の体験を申し上げます。牧師さんをだました恰好になりましたが、しかし私自身は賭として、洗礼を受けたわけであります。何故そんなバカな賭をしたか。それはいうまでもなく救われたかつたからであり、ほんとうに救われたかつたからであります。

いまから考えますと、この洗礼は、私にとつて決定的な意味をもつていたということができます。だから洗礼を受けてよかつたと思つているのであります。］

小説を書くようになつたとき、この人生には、ほんとうのものはなく、したがつて、ほんとうの解決はない、という結論をもつていたようであります。

世の人々は、このような私に〝実存主義の作家〟というのはまだしもなのでありますが、〝絶望の作家〟というレツテルを貼つてくれました。ところはこの絶望の作家は、この世に絶望しながら、飯を五杯もかき込んでいるわけなのであります。人間というものは、ほんとうには信用できないと宣言しながら、信用できない当の人間に向つてせつせと小説を書いているわけであります。

［削除　私の属している上原教会というところでは、このごろは、洗礼を受けなくても教会員になれるようになりましたが、私は、それに反対です。しかし教会の指導者である牧師さんがそうなさるのでありますから、きつと私などのうかがい知ることができない深遠な理由があるのだと思い、あるいは、ひよつとすると、私などはまだ見たことのない神が深夜、赤岩牧師さんの枕元へあらわれて、「これ、赤岩、洗礼などしなくてもいい。洗礼を拒否しているものでも教会員にしてやれ」とおつし

やつたのかも知れませんので、私は、自分の納得で」

○赤い孤独者を書いて行きづまること。

○そのころ新宿の駅前で売つていたアメリカのもつて来た五円の本。

［削除　○洗礼のこと。―昭和二十五年のクリスマス。何故なら私は、友人や知人から笑い者になるということを知つていながら、自分の一切をそれへ賭けてしまつたからであります。何故そんなことをしたか。ほんとうに救われたかつたからであります。その私にとつて、繰り返し聖書を読むという道をえらぶより仕方がなかつたのであります。そしてある日、聖書をよんでいて、クリスチアンの方の多くが経験していらつしやる、あの眼からうろこが落ちるという経験をしたのであります。ルカ伝の復活のくだりを読んでいたときだつたのであります。］

○しかしキリスト教へ眼を向けさせたものは、たしかにありました。それはドストエーフスキイという私の文学の眼をひらいてくれたロシアの作家であります。だから私にとつて、ドストエーフスキイは、文学へ眼をひらいてくれたと同時に、キリストへ眼をひらいてくれたという二重の恩人であるということができます。［削除　このドストーエフスキイの小説は、ことに後期の作品は、非常にむつかしいものであります。ことに私が一番最初に読んだ「悪霊」という作品は一番］何故ならドストーエフスキイは、徹底的に神の存在という問題を追及して行つた人であるからであります。

個と全体―孤独と愛―自由と連帯―をともに生かし得る根拠になる

［追記　フルシチヨフの共存］いわば第三の自由こそ、第三の立場こそ、新しい文学の可能性の根拠となると思うのであります。

椎名麟三講演メモ18

年月日不明、ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［1枚目］

1．信仰と文学

私は、この前に一度、この労働学校で話したのでありますが、そのときその私のお話をお聞きになつた方は、どんなに話が下手かということを御承知だろうと思いますが、しばらく御辛棒を願いたいと存じます。今日のお話は、「文学論」というむつかしげな題名になつていますが、別に専門的な論議を展開しようとしているのではありません。小説の本など、手にしたことがないとおつしやる方も、映画やラジオやテレビを通じて、ある小説の脚色という形でも、文学的なものに接していられると思います。もちろん脚色されたものは、原作通りのものではありません。先月の日本文芸家協会の理事会で、―私もその理事の一人でありますが、ときたま乱暴な脚色があり、石川達三*さんから、乱暴な脚色についての各放送局や映画会社に対する警告への動議があり、それを可決したことは、新聞でごらんになつた方があると思います。石川さんの体験によると、作品のなかで重要な役割を演じている人物を、脚色に困難だという理由で、話の途中で殺してしまつていたというのであります。私も、多少のその種の被害を受けています。一番ひどかつたのは、ラジオの名作集という番組で、私の「美しい女」という作品がとり上げられていたのでありますが、それは最初の三分の一だけで、後の三分の二はカットされていました。いくら「美しい女」でも、首だけで、胴体も足もないというのでは、美しい女といえるわけではないのであります。恐らくみなさんも同感して下さるだろうと思います。

しかしそれでも、文学的イメージの何程かは、つたえられているといつていいでありましよう。また、いま、推理小説ばやりで、松本清張*が月に六百枚も書くと聞いて私は警嘆（ママ）したのでありますが、すぐに水上勉*という推理小説を書く人があらわれて、月千枚を書くというのであります。もう何をかいわんやと思つていますと、今度は月に千二百枚だという新人があらわれて来た。しかし推理小説が、文学であるかとなると、そこに問題があります。ここにいい例があります。日本文芸家協会では、創作代表作集というようなその年の、問題作を出しています。むろん一つの作品の枚数には、収録作品を多くのせるために、五、六十枚が限度の短篇でありますが、丹羽文雄*さんが、ちよつと商売気を出して、推理小説ばやりだから、推理小説の代表作を出してはどうかという提案を理事会へ出した。だが、翌月の理事会では、その提案の撤去を自分でまた提案しなければならないとい

*石川達三　小説家

*松本清張　小説家。1958年の『点と線』がベストセラーとなり、社会派推理小説ブームを巻き起こした

*水上勉　小説家。60年代前半には『飢餓海峡』など社会派推理小説を多く執筆した

*丹羽文雄　小説家

［2枚目］

う破目に陥つておしまいになつた。というのは、推理小説の代表作全集というのは全く売れないということがわかつたからであります。一度、その小説を読んで犯人がわかつてしまうと、読者は二度と読まないということがわかつたからであります。松本清張は、純文学の出身でありますから、ある程度文学的なものをもつている。しかし他の最初から、推理小説作家から出発した人の作品は、そのトリツクがわかつてしまい、犯人がわかつてしまうと、もう二度と読めなくなつてしまうのであります。

それでなくても、一夜にして、有名になり、年収何千万という私たちからちよつと考えらない（ママ）収入が得られるという魅力は、小説志願の若い人々の心にある影響をあたえている。恐らく私一人ではなく、多の作家や評論家もその災難に出会つているのでしようが、私の場合にしましても、月に最小限二篇や三篇、作品を送りつけて来るのであります。そのまま送りかえすにも、一度はその小包みをあけなければならない。するとなかに必ず手紙が入つている。郵便法では違反なのでしようけど、そうなのであります。その手紙は、必ずといつていいくらい、どこかの雑誌社へ紹介してほしいというのであります。しかしそれにはくどくど、家族関係がうまく行かないということや、現在のつとめがつらいので、何とかそこから逃れたい。そのためにはどうしてもお金がいるということが書かれている。つまりその人にとつて問題なのは、自分の作品でなくて金なのであります。ひどいのは、あなたの作品なんか全然ない（ママ）けれど、聞けばあなたは、クリスチヤンだそうだから、出版社へ推薦してくれてもいいはずだ、というのもある。もつとひどいのは、二、三年前経験したのでありますが、ある日、一通の速達が舞い込んで来た。何ごとかと思うと、五万円すぐ送つてもらいたい。とどき次第作品を送るから と書いてあるのです。所書を見ると、四国の人ですが、これにはさすがの私も、いささか度胆を抜かされてしまいました。

ある日本の有名な作家は、何故小説を書くかと問われて、金と虚栄のために書いているんだと答えています。しかしむろんその作家のアイロニイであつて、何故小説を書くかという理由を拒絶するためのものであります。何故なら文学というものは、本来そういうものではないのであつて、たとえその作家が金と虚栄のために書いているのだとしましても、

少くとも作品に向つているときの彼はそうではないということだけは確言できるのであります。何故なら、小説ほど書いている人の人格、いいかえればそ（ママ）

［3枚目］

人がどんな自由を求め、どんな自由に生きているかを端的に示すものはないからであります。だから文学というものを一口に定義づけて、フランスのサルトルは「文学というものは、人間が自由を求める一つの仕方だ」といつていますが、正にその通りなのであります。だからそれがどうしても逃れないならば、ペンをすてて、デモに参加したり、ストライキに参加しなければならないということも起るのであります。文学と人間の自由を切りはなしては考えられないのであります。それは、文学をつくるという創造の場で起るだけではなくて、読むという行為のなかでも起るのであります。このことをわかりやすい例で申し上げたいと思います。

2．意識のめざめ

みなさん方は、いくつぐらいのときからの記憶をおもちでありましようか。天才の人は、もう二才ぐらいのときからの記憶をもつているそうでありますが、このなかに二才ぐらいのときの記憶をもつていらつしやる方があるとすれば、天才の資格は十分にあるわけで［追記　だから自慢なさつていい資格が十分ある］あります。私の場合は、残念なことには天才ではありませんので、せいぜい五つぐらいのときからの記憶しかありません。しかも断片的なものであります。母親の針仕事をしているときの姿だとか、どうも今から考えると、大阪の天王寺ではないかと思うのでありますが、母親とお寺参りしているときの記憶ぐらいなものであります。何故、記憶を問題にしたかと申し上げますと、人間の意識のめざめということを考えたいと思うからであります。そしてこの意識の本来の性格というものが自由という性質をもつているのであります。私たちが何かを意識できるということは、人間の自由とはきりはなしては考えられないと申し上げてもいいと思います。

［追記　「表現でつ（ママ）いて」の話のときをここで再確認して］

いいかえますと、人間の自由というものは、光源、光の源なのであります。だから自由を失つている人間というものは、何も見ることはできない。いわば死んでいる状態だと申し上げてもいいでしよう。それはたとえて申上げますと、真暗な部屋のなかに座つているようなものであります。自由という電灯をつけて、はじめて部屋のなかのものを見ることができますし、だからはじめて見たものを考えたり、そしてまた芸術的に表現できるのであります。ところがここで困つたことが起ります。みなさん方のめいめいもつていらつしやる自由の性質がちがうということであります。いわばそれは電灯の色がちがうようなものであります。

○赤い色、青い色

○その矛盾

［4枚目］

○読者の自由の立場。―純粋な自由。

○因業な高利貸のおばあさんの話。と映画。

3．文学と私との関係

この前の労働学校で、私が共産党員として検挙され、一年あまりの留置場生活に出会った拷問やその後の未決でどんな問題に直面し、その問題が私の現在に至る生活をどんなふうに決定して来たかを、お話し申し上げましたので、ここではふれません。ただ、私という人間は、少年時代、家庭の不和から家出しなければならなくなつて以来、一図（ママ）に人間の

自由を求めて来た人間であるということだけで、問題を私と文学との関係に限定したいと思います。

私は、家出少年時代は、自然科学の本が好きで、それから自然に社会科学の本を読むようになりました。満で十七才ぐらいのとき読んだドイツの社会主義者の書いたベーベルの「婦人論」が、私にとつて最初の左翼的な思想の洗礼であつたわけなのであります。だから、母の自殺未遂を契機に、関西の私鉄の交通労働者となつたのでありますが、車掌になつて間もなく、非合法の労働組合である全協（全国労働組合）*の支部を職場に組織したのであります。むろんその労働組合をプールにして、共産党の細胞をつくつて行きました。その党からやつて来る非合法の出版物で、はじめて小説というものにふれたのであります。

○その小説に出て来る労働者

○実践のなかにあるふかい孤独。

焼酎、マージヤン、「何故生きているのか」というニヒリズム。

○内面性の問題―孤独と愛―個人的存在として考えても、

先刻、意識のめざめにふれましたが、天才は二才ぐらいから意識をもつていると申しましても、この世のなかの何かについての意識であり、自由なのであります。そのかぎりでは、この世界全体というもの、少くとも自分の世界から引きはなされるということはないわけなのであります。

○孤独の問題と愛、

○池の話。

＊全協（全国労働組合）　正式名称は日本労働組合全国協議会。日本労働組合評議会解散後、1928年に結成された左翼労働組合。日本共産党の指導のもと、プロフィンテルンに加盟。度重なる弾圧や内部対立などにより1936年に自然消滅した

［5枚目］

○車掌となり、間もなく非合法の労働組合である全協（全国労働組合協議会）の支部を組織し、その労働組合をプールにして、共産党の細胞をつくつて行きました。その党からやつて来る出版物で、はじめて小説というものにふれたのであります。

○その小説に出て来る労働者。

○実践のなかにあるふかい孤独。

焼酎、マージヤン、「自分は何のために生きているのか」という呟き。

○労働者を生きた具体性においてつかまえていないということ。

○「文学（ママ）は、政治的な実践には役に立たない。

○拷問や未決で出会つた愛のニヒリズム

○出獄後は、獄中で偶然読んだニーチエから、いわゆる（生の）実存哲学の本を読んで行つたこと。キルケゴールやヤスパースやハイデツガーやその系譜のなかに入つているというので、ベルグソンやデイルタイ＊など。―しかし何の解決も得られなかつたこと。

＊デイルタイ　ヴィルヘルム・ディルタイ。ドイツの哲学者

椎名麟三講演メモ19

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・ペン書

女子学院での講演

女子学院

私は、ただでさえ、話が下手ですか（ママ）、こんな若い人々を前にしてお話

しするのは、数年前一度したきりであります。というのは、その一度でこりてしまつた。自分自身に絶望したわけであります。私は、相手が大学の先生であれ、一般の人々であれ、自分の思つていることしか話せないというところから来ていると思います。さらに申し上げますと、自分の問題としていることしか話せない。しかもその問題は、私にとつてはむつかしい問題なので、ついむつかしくなつてしまうようなのであります。で、今日はできるだけやさしくお話しするつもりでありますが、もしむつかしいところ、わけのわからないところがありましたら、後で御質問いただければありがたいと思います。

人間の一生を考えて見ますと、青少年時代にその方向が決定してしまうのではないかと思います。私は、人から「人間の自由」というものを課題にしている作家だといわれていますが、それは、少年時代に自分の自由を求めずにはいられない環境に投げ込まれたせいだと思つています。

[以下ページ欠落]

椎名麟三講演メモ20

1961年頃［推定］、ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［1枚目］

それでは、ジミイという男は、どんな男が申（ママ）しますと、労働者出身なのであります。作者のオズボーン*がそうであつたようにであります。そしてジミイは、苦学をして大学を出たのでありますが、自分の「意味のある」生活として何をやつているかというと駄菓子屋をやつているのであります。私は、イギリスはもちろん外国へ行つたことがありませんので、イギリスの駄菓屋（ママ）というのは、どんなものか知りませんが、映画で知つているかぎりは、日本と同じように子供が飴玉や駄菓子を買いに来る店のようで、その主人も老人であるようであります。日本よりもガラスのケースがちやんとしているようであります。とにかくジミイのような前途有為の青年のやる仕事ではない。この駄菓屋（ママ）を、クリフという自分に残されたただ一人の友人、扱いにくいいやなやつだと思われる男に、あの男にもいいところがあるんだと女房でもあるかのようにつきしたがつている不思議なほど善良な男が世のなかにいますね、そのクリフはそういう男なのでありますが、その男と一緒に駄菓子（ママ）をやつているわけなのであります。私が、何故、駄菓子屋にこんなにこだわつているかと申しますと、前途有為の大学出の青年が、ほかの職業がつけないわけはないのにわず（ママ）とえらんで駄菓屋（ママ）をやつているということのなかに、作者のそしてジミイの現代に対するいらただし（ママ）いプロテストがあると感じられるからであります。

この芝居は、三幕で、その場面は、ほとんど日曜なのでありますが、ジミイは、何ものも信じられない。恋人と同棲しているのでありますが、その恋人にもいじわるく当り散らし、恋人さえもいたたまれなくなつてしまう有様であります。そのジミイは、何をしているかというと、老人のように新聞を読んでいるのでありますが、そんな自分に耐えられなくて、同じアパートにいるクリフに対しても、毒舌をはき散らしたり、わるふざけをしたり、始終いらいらしながらのべつまくなしに喋つているわけなのであります。そのいつていることは、次の一つのせりふに要約されると思います。つまり彼はこういうのであります。「現代には有意義なものは何一つありやしない。ただ、おれたちはピカドンでふつとぶだけだ。といつてそれがこの豪勢なお国の役に立つわけではない」というのであります。もう彼のいう豪勢なお国とは、イギリスのことを皮肉にそういつていることは申すまでもありません。しかも現代において生きるということは、どういうことか。彼は、いうのであります。

*オズボーン　ジョン・オズボーン。イギリスの劇作家。「ジミイ」はオズボーンの代表作『怒りをこめてふり返れ』の主人公

［2枚目］

「全くおめでたい無鉄砲な話だよ。走つて来るバスの前に立つているみたいに愚かなことだよ。しかしそれ以外に仕方がないやね」

というのであります。彼は、労働者出身なのでありますから、どうして共産主義にその希望を見出さないのか、とみなさま方のうちにはそう思われる方もあるかも知れません。しかし彼は、それを否定はしないが、ただ、それに対していらいらしたものを感ずるだけなのであります。それにほんとうの希望も救いも見出せないようであるからであります。といつて教会のベルを聞いてもまたいら立つ。第一次大戦後の青年とくらべてこの「怒れる若者」の特徴的な点だと思うのでありますが、教会は否定しないが、その存在に対してはいら立つわけなのであります。少くとも彼にとつて、教会は、ほんとうの希望も救いもあたえるものではないからであります。いいかえますと、バスの前につつたつているより仕方のない、生きているのは、ただの愚かさからだとしかいいようのないこの人生に対する絶望から救つてくれるものではないということなのであります。

さて、ここで考えてみたいのは、一人の作家が、自分の絶望から救つてくれるものはないと人々に訴えることは何を意味するか、ということであります。いいかえれば、自分を生々と生かしてくれるところのほんとうの希望をほんとうの救いを求めているということなのであります。

それでは、アンチ・テアトルの運動のなかに生れたベケツト*の「ゴドーを待ちながら」について考えてみたいと思います。この作品は、「怒りをこめて振り返れ」と同じ七、八年前に上演されたものでありますが、発表当時は、前衛劇として絶対肯定するものと、絶対否定するものと、つまり極端な賛否にわかれて議論が沸騰したといわれているのでありますが、前衛劇というのは、とにかく当らないといわれているにかかわらず、興行的にも成功してロングランとなり、二年にわたつて再演を重ねて、上演回数は三百回を越えたといわれているものであります。

といえば、何か面白い筋でもありそうでありますが、全く何の筋も状況の変化もないのであります。エストラゴンとウラジミールという二人のうらぶれた紳士のような男と、これまたうらぶれたような労働者のような男と、木の一本ある道ばたで

*ベケット　サミュエル・ベケット。アイルランドの劇作家

［3枚目］

「ゴドー」という人物を待つているというだけの芝居であります。第一部と第二部の、いわば二幕の芝居でありますが、第一部も第二部も何の状況の変化もない。つまり「ゴドー」という人物のやつて来るのを待つているというだけなのであります。おたがいに何の意味もない支離滅裂のことをしやべりながらであります。たとえば、「キリストと二千年前に一緒に生きていたけど、あいつは先に死にやがつた」というようなせりふを聞くと、二千年前から生きていたようでありますが、しかし何十年前から待つているようでもあるのです。そしておちぶれた紳士風の男は、頭ばかり気にしている。つまり帽子ばかりを気にしていて、何かといえばすぐオシツコがしたくなつてしまう。一方のウラジミールという

おちぶれた労働者は、足の方ばかり気にしている。つまり破れ靴をぬいだりはいたり、その臭いを嗅いでみたりしているだけなのであります。そんなくだらないことばかりして何をしているのかというと、「ゴドー」を待つているだけなのであります。しかもその二人の人物にとつて、「ゴドー」という人物は何者なのか、さつぱりわかつていない。男か女かということさえはつきりしていない。ただ、確実なことは、彼がやつて来さえすれば、ほんとうに救われる、ということなのであります。

　これは、去年、文学座のアトリエ公演*で上演されたものなのでありますが、この芝居を見た日本の観客の多くは、さつぱりわけがわからなかつたようであります。つまりほんとうの救いを求めている痛切さは、日本よりフランスの方が強いのでしよう。つまり日本人のようが、フランス人より、幸福すぎるのかも知れません。また、この作品が、神学的な作品だといわれていることから、キリスト教の地盤にいない日本の方々にはわからなかつたということもあるかも知れません。しかし私は、日本人であつても、ほんとうの救いの痛切さを感じていると思うのであります。少くとも、私も日本人の一人であるかぎりにおいて、全部の日本人がだめだ、ということにはならないと思うのであります。

［削除　この「現代とニヒリズム」という話において、何故小説でなく芝居をとり上げたかと申しますと、小説よりも芝居の方が、そのときの時代というものに対して敏感であるからであります。そしてこの二つの芝居からも、ほんとうの救いを求めているヨーロッパの絶望、少くともイギリスやフランスの絶望が感じられるのであります。］

◎ヨネスコ*の「無垢の殺し屋」―カフカ*の審判に似ている。

＊文学座のアトリエ公演『ゴドーを待ちながら』の日本初演は、１９６０年5月24–30日、文学座アトリエ公開公演として上演された

＊ヨネスコ　ウジェーヌ・イヨネスコ。ルーマニア、フランスの劇作家

＊カフカ　フランツ・カフカ。チェコの小説家

椎名麟三講演メモ21

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書

　さて、戦後「深夜の酒宴」を発表したのを契機に、次々と作品を書きはじめましたが、それらの作品に一貫していることは、自由への追求であつたわけであります。どんな自由をか。最後に私を行きづまらせてくれた「赤い孤独者」と題名があらわしているように、この題名はあまりいい題名とはいえませんが、しかしそのときの私の希望をあらわしていることだけはたしかなのであります。それは、社会的な自由と個人的な自由を共に生かしてくれる根拠となるところの自由であります。第三の自由といつてもいいでしよう。しかしそれがどうしても得られなかつたところに、この現代を、自分をいつわらずに生きて行くことに絶望したのであります。［追記　新宿でののんだくれ］結局ドストエーフスキイに対する信頼と、荒本*というキリスト者―戦後共産主義に近寄つて、アンチ・クリストという論文を書き、そのころ私たちのやつていた「次元」という雑誌に発表しました。「次元」という雑誌は、私の友人船山馨*とある映画雑誌の出版社の社長の援助を得て出していた雑誌で、ちやんとした原稿料も払いました。福田恒存*の戯曲、たしか「キチイ台風」だつたと思いますが、雑誌の半分をつぶして掲載し、その原稿料を社のものにとどけさせて、福田恒存を喜ばせたこと、そのころ戯曲を掲載して原稿料を払うような雑誌がなかつたせいであります。それから島村進*という

新人を発掘したこと、しかし彼は、間もなく女房の問題で書けなくなつてしまいました。それから荒本の「アンチ・クリスト」という論文が、その二年間つづいた雑誌の功績といえば功績でしょう。この荒本さんは、私の家の前にいた熱心なキリスト者で、彼の書斉には、外国語の聖書がずらりとならんでいました。しかし彼が、「アンチ・クリスト」という論文を書いて間もなく、腸捻転で、手術を二、三回やつて、その手術の傷口に糞汁がにじみ出ているという悲惨な状態で死んだのでありますが、私が最後に見舞いに行つたとき、私へ「織田作*のようになるな」というのがやつとのようでありました。そして彼は、呟くように、「ぼくは神を信じていたのに」といつたのであります。それから二、三時間後に彼は死んだのでありますが、この彼の呟きは、私に強いショツクでありました。大げさにいうならば、神を見たような気がしたのであります。私より、二つ三つ若かつたのでありますが、実に誠実な男でありました。

　そして、ドストエーフスキイに対する信頼と、荒本さんの死と、神にして人というイエス・キリストの存在へひかけ（ママ）れてキリスト教へ自分自身をかけたのであります。むろん一年ほどは聖書を読んでも、マタイ伝の第一頁からつまずくわけで、つまりどうしてもキリスト教がわからなかつたわけであります。そして一年もたつたあるとき、ルカ伝を読んでいるとき、眼からうろこが落ちる思いがしたという経験をもつています。

＊荒本　荒本守也。本名・清水義勇。ドイツ語辞書編集者。クリスチャンであり、日本共産党員でもあった。椎名麟三の自宅前に住んでおり、親しく往来した

＊船山馨　小説家。戦後、妻の佐々木翠（本名・船山春子）・椎名とともに、出版や印刷・貸本を扱う「創美社」を世田谷の千歳烏山駅前に設立した

＊福田恒存　文芸評論家、翻訳家、劇作家。講演で触れている戯曲は正しくは「キティ颱風」

＊島村進　小説家

＊織田作　織田作之助。小説家

椎名麟三講演メモ22

１９５９年7月以降［推定］、ノート紙4枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［1枚目］

　私は、あのイギリスのオズボーンの訴えを聞いたのであります。そして私は、そのあまり上手だとはいえないその芝居に、近来にないショツクを感じたのであります。私はそのころ演劇運動を推進するために、千田是也*や田中千禾夫*や野間宏*や安部公房*や堀田善衛*木下順二*などの諸君とある会合*を月に一回もつておりますが、その会合でこのオズボーンについての報告会をやつたのであります。そのとき、木下順二も、私と全く同じ言葉で、その芝居にショツクを受けたと云つていたのであります。

　「怒りをもつて振りかえれ」という芝居の題名が示しているように、イギリスのいわゆるアングリイ・ジエネレイシヨンは、怒りをもつて過去にいどみかかるのであります。何故未来に対してではないのか。と申しますと、未来は彼等にないからであります。彼等にできることは、振り返ることだけであり、未来がないわけなのでありますから、そのことに怒つて振り返るわけなのであります。その劇の主人公ジミイは、いらいらしながら、のべつまくなしに喋り立てる。彼は、いう。「有意義で雄々しい目的なんてものは、一つもない。一たびピカドンとくりや、お

れたちはふつとんでしまうだけさ。そうなつたところで、古い時代の豪華なお国の役に立つわけではない。全くおめでたい、無鉄砲なだけだよ。走つて来るバスの前につつ立つているようなもんだ」という。しかし彼がそういうとき、情熱のはけ場を失つて、ただいらいらしている怒れる若者たちの、暗い絶望と孤独が感じられて来るのであります。そこには、生きて行くためのホントウの根つこをもつていない人間というもののいら立ちが感じられる。

その彼等には、反抗しようにもホントウに反抗したい対象をもつていない。しかも行きとどいたイギリスの福祉国家が、その反抗さえ骨抜きにしようとかかつているようにさえ思われる。私は、社会福祉の行きとどいているスエーデンなどで、かえつて自殺者が多いという話を聞いて、妙な気がしたのでありますが、オズボーンのこの芝居を見ていたとき、その彼等の背景にも、それと同じような無気力な人間がいるように感じられたのであります。しかしこのジミイさえ、ジエームス・デイーン*の名を口にするのであります。デイーンが、彼の魂であるかのようであります。

そして私は、遂に共産圏にあるあのポーランド映画においても、ジエームス・デイーンを見たのであります。「灰とダイヤモンド」でありますが、その前の「地下水道」も、そして「影」もいわゆる商業映画にはないところの強い訴えをもつていて、非常にいい映画でありましたが、この「灰とダイヤモンド」も非常にいい映画だと思います。この映画は、終戦時の混乱が背景になつているのでありますが、昨日までドイツ兵を射つていた同じ情熱と同じ信念で、同胞に対する暗殺者とならなけ

*千田是也　演出家、俳優
*田中千禾夫　劇作家、演出家
*野間宏　小説家、評論家
*安部公房　小説家、劇作家、演出家
*堀田善衛　小説家、評論家
*木下順二　劇作家、演劇評論家
*とある会合　労働者音楽協議会のことか
*ジエームス・デイーン　ジェームス・ディーン。アメリカの俳優

［2枚目］

ればならないマチエツクという若者が主人公になつているのであります が、その若い役者は、ポーランドのジエームス・デイーンの再来を騒がれているというのでありますが、それほど動作もその風貌もそつくりなのであります。しかし、デイーンが少しあまいところがあるに反して、このチブルスキイという役者は、もつとからくもつとドライだといえるでしよう。しかしその人生に対する考え方までも似ている。その彼は、まるでポーランドの怒れる若者*を代表しているようにさえ思われるのであります。その彼は、最後に近くなつてから真剣に問う。「自分のいままで信じて来たことを、すべて信じていいんだろうか」もちろんこの問いに対して、自分の正しいと思つていることが、すでに信じられなくなつている彼の暗い絶望が表現されている。それに対して彼の相棒は、「信ずるより仕方がないじやないか」と答えるのであります。このすべてをほんとには信ずることはできないという気持は、あの敗戦当時ソビエトに裏切られたといわれるポーランドの若い人々の心のなかにとけがたいものとして残つているものかも知れないと同時に想像されるのでありますが、

アメリカやフランスやイギリスや、そしてポーランドなどにおいて、打ちのめされた、そして怒れる若者たちが生れているということ、そして彼等の怒りや絶望や孤独は、彼等にはもう信ずるに足る未来がないというところからやつて来ていると思われるのであります。全くアメリカやイギリスやフランスは戦勝国でありますから、このような現象は不思議な気がするのであります。何故ならば、怒れる若者たちに相当するのは、わが太陽族*でありましようが、しかし我等の太陽族は、外国の若者たちの極端な貧しさにくらべて、ヨツトを乗りまわしたりして、まことにしたい放題のことができるように思つているようであります。わが太陽族にこそ、ホントウの未来があるかのようなのであります。

しかしそれはホントウでありましようか。これらの映画や劇の主人公は、男であるからと云つて、女のあなた方に関係がないといえないのであります。それは、その主人公を理解できる女たちが出て来て、その主人公たちと同じようにひどい目に会うことになつている、というだけではありません。より根本的に、彼等の怒りや絶望こそ、人間本来のものであり、現代というもののもつているニヒリズムにふかく根ざしているものだと思われるからであります。少くとも、私に関していえば、彼等のいら立ちの根源になつているものが、私のなかにもはつきりあることを感ずるのであります。私が、「怒りをもつて振り返れ」という芝居を見てショツクを感じ

*怒れる若者　アングリーヤングメン。オズボーンの「怒りをこめてふり返れ」からうまれた言葉。旧来の価値観に反抗する若者たち、また、そういった人物たちを書いた1950〜60年代の作家を指す
*太陽族　1955年発表の石原慎太郎「太陽の季節」からうまれた言葉。既存の道徳や価値観にとらわれず奔放な行動をとる若者たちをいう

［3枚目］

たのも、私自身のなかに、オズボーンの訴えるところのものと同じ感情が内在していたからなのであります。

先刻から、いわばアメリカやヨーロツパの諸国の若い世代に、彼等の代表者であるかのようにデイーンの名が口にされているのは、デイーンのあの暗い、いらただ[ママ]しい「理由のない反抗」にふかい同感をもつているからだと思われるのであります。そして理由のない反抗というものをさらに押しすすめて行きますと、その反抗の理由のなさは、そもそもにおいて人間の存在の理由のなさに通じており、またフランスのアルベール・カミユ*が「シジフオスの神話」のなかで云つている「不条理な感情」といわれているものにも通じているのであります。広津和朗[ママ]*さんと中村光夫*さんとの間に、カミユの作品である「異邦人」に関して、論争が起つたことがありますが、「ムルソー」という主人公のおかした殺人を、公判廷で「太陽のせいだ」というのでありますが、それはむしろ積極的な理由の拒否だつたわけであります。そしてフランスの怒れる若者たちの反抗が、実存主義的な風貌をおびているということも、カミユの不条理に通ずるものとして考えれるような気がするのであります。

このように生きるにも死ぬにしても、私たちを納得させてくれるホントウの理由がないということ、根拠となる根つこがないということは、私たちをいら立たせます。死は生理的な必然だと云つても、死にたくないものをどうして納得させてくれるでありましようか。そしてたとえまやかしでも希望のある平和な時代においては、私たちは、私たちの存在の理由のなさをごま化して生きていることができるでありましようが、「怒りをもつて振り返れ」のジミイが云つていますように、ピカドン一発でふつとんでしまうこの危機の時代においては、人間存在のこのような条件というものは、裸にされて私たちの眼に見えて来るのであります。

私は、このことについて、戦争中の一つの体験が思いうかんで来ます。

私の近所に純真なハイチーン*がいました。彼は国を愛し、天皇のために死ぬことを誇りに考えている、立派なハイチーンでした。しかし空襲のあつた夜のことであります。サーチライトに照し出されて銀色にうかんでいるB29の空襲を見ていたのであります。それは本所や深川を空襲された夜でした。それは(ママ)私は、ハイチーンの少年と世田谷から見ていたわけなのであります。その空襲の一くぎりすんだらしいころです。私は、その少年に、地球と衝突しそうになつたウインネツケ彗星やハリー彗星などの話をして、やがてこの地球もほろびてしまうことになつているのだという話を

*アルベール・カミュ　フランスの小説家、劇作家、哲学者
*広津和郎　小説家
*中村光夫　文芸評論家、小説家、劇作家
*ハイチーン　ハイティーン。10代後半の年代のこと

[4枚目]

したのであります。するとその死んでもいいと思い、実際そのつもりで喜んでいたその少年が、急に恐怖の表情をあらわして、「そんなことあるもんか、そんなことあるもんか」と口走つているのであります。もちろん寒さのせいではありましようが、身体さえガタガタふるわせているようで、私は、その思いがけない彼の様子に強いおどろきを感じたことがあるのであります。自分一個の死には全く平気であつた彼が、世界全体、この地球全体がほろぶということになつて、はじめて彼の存在の根が彼に見えたのだということができると思うのであります。

そして現代は、この全体が失われてしまうという危機において、人間の存在の根つこのなさがが(ママ)その姿をあらわして来ている時代だと思われるのであります。[削除　その根とは何でしようか。]いわば人間にあると思つていた根つこが、全くなかつたのであります。生きるということにも私たちをホントウに納得させてくれる理由なるものはない、また同様に、死ぬということについても、私たちをホントウに納得させてくれる理由なんか、ないということなのであります。そしてこの人間の事実というものは、戦後の世界の文学が出発したときの根拠でもあつたわけなのでもあります。このような人間の事実のなかで、人間の自由というものがあり得るのだろうか、そしてまた、このような事実のなかで生きて行くには、どうすればいいのか、ということが、戦後に出発した文学の課題であつたわけなのであります。

もしこの答えが見出されないときには、あの「怒りをもつて振りかえれ」のジミイのように、いらいらじれるばかりで、何もしないし、また何にも責任をもつこともできないで、新聞を読みながら、退屈をまぎらして行くより仕方がないのであります。そこにあるのは、ただ、理由のない反抗ばかりだと思われるのであります。その反抗は、希望のある抵抗になるということは、絶対にないと云つていいと思うのであります。「灰とダイヤモンド」の青年は、最初ドイツに対する抵抗組織に属していた。しかし何も信じられなくなつたとき、だから希望を失つたとき、単なる政府軍に対する反抗として、暗殺者、つまり殺し屋になるより仕方がなかつたのであります。いいかえますればほんとう希望(ママ)のないところに、ほんとうの意味の生きて行く道もあり得ないということなのであります。しかし人間は、とどのつまりは、死ぬものであり、希望のないものだとするならば、どういうふうにして希望をもち得るでしようか。—それが先刻も申しましたように、世界の戦後文学といわれるものの出発点だつたと云つていいのであります。

しかもそれはまだ解決されていない。しかし世界の若い人々から解決を要求されているのであります。

椎名麟三講演メモ23

1962年以降[推定]、ノート紙2枚　鉛筆書
「たねの会」での講演

[1枚目]

の復活の箇所を読んでいたときに、キリスト者の多くの方の経験していらつしやることと同じなのでありますが、あるショツクとともに眼からうろこの落ちる思いがしたのであります。

以来、キリスト者として文学活動をつづけて来ました。このことは、去年、お話し申し上げたので、ここではふれません。ただ、私が、「たねの会」へ入る前の、世界の特にわかい人々の精神状況が、とくにキリスト者の責任をつよく求めていたということを申しのべたいと思います。むろん私は、外国語ができませんし、外国旅行をしたは(ママ)、中国へ行つたという以外はありません。ただ、小説や映画や芝居を通じてそれを知るだけであります。

そのころ、ヌーベル・バーグ*の映画が入つて来た。とくに印象に残つているのは、「危険な曲り角」*で、そこにフランスのある若い人々の生態が描かれていた。実存主義者を気取る、妙な格好をした若い人々であります。そして彼等が、あの「エデンの東」*や「理由なき反抗」*のジエームス・デイーンの名を口にしていたということが、私の興味をひいたのであります。

*ヌーベル・バーグ　ヌーヴェルヴァーグ。1950年代後半からフランスで起こつた映画運動
*「危険な曲り角」　マルセル・カルネ監督のフランス映画。1959年日本公開
*「エデンの東」　ジョン・スタインベック原作、エリア・カザン監督のアメリカ映画。1955年日本公開
*「理由なき反抗」　ニコラス・レイ監督のアメリカ映画。1956年日本公開

[2枚目]

そしてその戦後文学の課題は、むしろ世界の若い人々から解決を要求されており、その要求に答え得るのは、キリスト者だけだというのが、私の「たねの会」へ入つた動機であります。[削除　その論理的な裏付けについては、作品集に書いておきましたから、御読みになつていただけるなら幸いだと思います。]

椎名麟三講演メモ24

年月日不明、ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書
NHK高知放送局用の放送メモ

[1枚目]

NHK高知放送局

私は、今日、坂本竜馬の碑を見[削除　て来た]に行こうと思つているのでありますが、私などは、あの幕末の当時、坂本竜馬は、新しい時代につよい関心をもつていた、いわば新しい人間だつたというような印象を、[削除　私などは、]映画や芝居なんかを通じて、受けているんですが、新しい文学というようなものに関心をもつている私は、こんな想像をし

たんです。つまりもし坂本竜馬が、小説を書いたとするならば、どんな小説を書いただろうかということを［削除　想像したん］ですよ。もちろん、実際坂本竜馬は、小説を書いていないんですから、どんな想像もあたらないわけなんですが、その内容はとにかく、ただ一つ、もし坂本竜馬が、小説を書いたとするならば、おそらくきつと、当時の人々には理解できない新しい小説だつただろうということだけは、いえる気がするんです。

何故、そのようなことをきつぱりいえるかといいますと、小説というものは、その作者の生き方や思想をはなれては、成立しないものであるからです。ところで、人間の生き方や思想というものは、それは御存じの通りさまざまなんでありますが、たとえさまざまではありましても、戦後何かといえば口にされるところの人間の「自由」に根拠をおいていることはいうまでもないことです。いいかえますと、さまざまな自由がありますから、いろいろさまざまな生き方や思想が生れて来るのだ、とそう申していいと思うんです。自由といいますと、大層むつかしい気がしますが、一口にいって、この世界に対する人間の精神的な態度［削除　□を指して］と関係があるんだと考えていただければ、そう大したまちがいはないでしよう。

だからその態度のもち方によつて、さまざまな自由を生み、さまざまな文学が生れて来ます。自然主義文学だとか、社会主義文学だとか、戦後は、実存主義文学とかいうものが生れて来ました。もちろんそれそれが、人間の自由というものをどう考えるか、どんな自由に人間の救いを見出すのかということによつて、いいかえますと、人間のほんとうの自由とは何なのか、ということによつていろんな［削除　そのような］ちがつた文学が生れて来［削除　たのであります］るんです。

自然主義文学の場合は、そのあらわれ方はいろんなものがありますが、根本は、この自然を絶対的なもののように考えます。自然というものは、人間を超えて自由なんだ、だから自然は人間に対する救いなんだ、という考え方の上に立つている。苦しいときなど、海を眺めたり、大空を眺めたりしていますと、自分の苦しみなんか海や大空の彼方へ消えて行くような気がして、何だか救われたような気がしますね。つまり自然が、［削除　いわば］神様のように感じられるわけであります。日本人は、とくにこの傾向が強いのではないか、そう思つています。また、自然を絶対と考えるために、どうしても、自然主義という

［2枚目］

ものは、運命論的になりやすく、決定論的になりやすいという傾向をもつています。

［このような自然を自由と見る考え方を［削除　嘘］まちがいだ、というのが社会主義的な文学の立場だといつていいでありましよう。自然を神様とするのは、決して苦しみやなやみのほんとうの解決ではない。むしろほんとうの解決というものは、その苦しみやなやみを生んでいる社会的な矛盾から人間を救い出すものでなければならない。いいかえますと、人間のほんとうの自由というものは、階級のない社会的な未来にあるのだ、とこう考えるわけであります。

文学というものを大別しますと、大抵は、この二つに要約されるといつていいでありましよう。自然主義は、だからどうしても個人主義的なもの、主観主義的なものとなり、一方は、社会全体のためというような全体主義的な、客観主義的なものとなることは避けられないでありましよう。しかしこれら問題は、［削除　大］昔から、個人と全体とか、自我と社会だとか、一と多だとか、いま流行の言葉といえば、組織と人間だとかという問題として、どちらに根拠をおく自由がほんとうの自由なのか、として追求されて来て、いまだに解決されてはいない。戦争中、減私奉公という言葉がありましたが、私をすてて公を生かすのがほんとうの自由なのか、それとも逆に公の方をすてて、私を生かすのがほんとうの自由なのかという問題でもあるんです。

だが、戦後、戦争やレジスタンスを通じて、どちらにも生きるのが、ほんとうの自由だという主張が生れて来たのであります。つまり、私にも生き、公にも生きさせることのできる自由こそ、ほんとうの自由だという主張なのであります。つまりたがいに矛盾する自由に同時に生かせるところの自由、つまりいま、はやりの言葉でいえば、矛盾する二つのものの共存ですね、それこそほんとうの自由だというわけなんです。それがサルトルやこの間自動車に死にましたカミユなどのいいだした実存主義文学の考え方の根本にあるところの考え方なのであります。

私自身も、青年時代から、この「ほんとうの自由」を求めて、いろいろひどい目に会って来ましたが、それはとにかく、何故文学において、このように「ほんとうの自由」というものを、これほど考えねばならないのか、不思議だとお考

［3枚目］

えになるでしよう？しかし最初に申し上げましたように、文学というものは、人間に生き方に根拠をもつており、したがって人間の自由というものに根拠をもつているということから、すぐ結論がつくことと思います。それは、「ほんとうの文学」というものを、この地上に確立したいからであります。しかし「ほんとうの文学」というものは、「ほんとうの自由」というものがなければ生れて来ないということもいま申し上げた通りです。全く人間にほんとうの自由が発見されないかぎりは、ほんとうの文学はあり得ないのだ、といっていいからであります。

椎名麟三講演メモ25

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

サマセットモーム*

――文学の方法に、大別して二つの方法がある

一人称的な方法と客観的な全体的な方法

◎何故むつかしいかということ

［削除　全体と個―真実を意味するホントウの欠如

ホントウのニヒリズムを克服してくれる自由の欠如］

ホントウの文学とは何か

［削除　○人生に対する無意味な感情　切　友人の妻の話。］

○新しい文学の可能性の根拠

大江健三郎*

倉橋由美子

○北海道の女工さんの文集

だが、その物心がついてから奴隷であつたようなその老人には、主人公の自分自身を鎖から解き放つという行為が理解できない。主人公に向つて、「何故そんなことをするのか」とたずねる。すると主人公は、それに対して、［［削除　君］おれたちは自由なんだ」とこたえるわけなのであります。そこで、その船のなかで、悪人たちに対する奴隷たちの暴動が起るわけなんですが、「自分たちは鎖から自由である」ということを知つたとき、いままでとちがつた新しい生き方が、つまりいままでの奴隷の生き方とちがつた生き方がはじまつて、それが暴動という形に

なつたのだということがいえると思うのであります。

このように新しい自由は、新しい生き方を生むのであります。だからまた人間のちがつた自由というものは、ちがつた生き方をもつているということもたしかであるだろうと思います。[削除　したがつてまたその自由の種類によつて、いいかえれば、それぞれの生き方によつて、それぞれの文学を生んで行くにちがいないということは、すぐに考えつかれることだろうと思われるのであります。]自由という言葉の意味は、その人によつてちがいます。大きくはアメリカのいう自由とソビエトのいう自由とちがうでしょう。いいかえますと、その一つの自由が、どんな救いを意味しているのか、ということによつて、その自由の性質がわかるのであります。あの奴隷船のように、奴隷を鎖から救うところの自由であるのか、この世の心配や不安から救う自由であるのか、または、この社会やこの世界の不合理から救う自由であるのか、というように、「何から救い何から救われるのか」ということによつて、自由の性質がちがつて来るわけなのであります。

いいかえますと、何から救い、何からどう救われるのか、という自由という質によつて、いろんな[削除　文学]思想が生れて来たと申し上げることができるのであります。だからまた、何からどう救うのかということによつて、そのもつている自由というものの性質が、したがつてそれに根拠をおく人生観や世界観などがわかるのであります。

[わかりやすい例で申し上げましよう。][削除　ここに一つの小説がある。作者は、気の毒ですから申し上げませんが、その話は、男と女がある日愛し合うようになるのでありますが、しかし女の方は、次第にその男に不満を感じて来る。何故な]

これらの作品のむつかしさは、私たちのなじみのない自由や救いの観点から書かれているということであります。—

＊サマセットモーム　ウィリアム・サマセット・モーム。イギリスの小説家、劇作家
＊大江健三郎　小説家

椎名麟三講演メモ26

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

[削除　たないのだ」と結論が形づくられて来たようなのであります。]

さて、私は「私が間ちがつていました、」という転向上申書をかいて、おかげで執行猶予になつて、社会へ戻つて来ましても先程申し上げましたように、実存哲学の本を読みながら、自分を生かしてくれるところのほんとうの自由というものを求めて来ました。関西では生活できず、間もなく東京へ出て行つたのでありますが、どこへ行つても特高につきまとわれているわけでありますから、就職もできずひどいものでありました。特高は、勤先へ一週に一度か二度は必ず友人だとか知人だとかいつてたずねて来るのでありますが、すぐ、雇主には、その男が警察の人間であるということはわかるのであります。で、そこを追い出されるという破目に、二度も三度もありました。その最初のころ、逆に特高に就職口を世話してもらつたことがあります。それは、姫路のマツチ工場の雑役夫なのであります。そのときのお話をすると、当時の私の精神状況というものがはつきりするので申し上げますが、そのマツチ工場での仕事は、実にひどいものなのであります。マツチの棒を立てる一メートル角の枠に震動をあたえて棒を立て、それを鉄の金具でしめつけるのでありますが、震動によつてその金具が、工場の隅までとんで行く。そういう枠組の機械は十台もあり、しかもその掛りの人は、受取仕事、つまり能

率給なので、とんで行く金具など見向きもしない。で、その金具は、とび放題に工場のなかにとび散る。それを古バケツをさげて、ミレー＊の描くところの落穂ひろいのように、腰をかがめて拾い歩く。何しろ鉄の金具ですから、バケツに半分もたまると持ち上げられないほど重くなつてしまう。だから仕事が終ると、腰がのびないだけでなく、くたくたにくたびれてしまうのであります。もちろんそんな問題は、馴れれば解決したでしよう。しかし問題は、もらう給料では食べては行けないのであります。しかしその私を支える、何かほんとうのものがあつたとしたら、それに耐えて行けるでしよう。しかし私には、もうそのような精神的な支えというものは失われていたわけであります。そして死んだ方がいい、と判断したわけであります。

そこで私は、工場から梱包用の荒縄をもつて帰つて来ました。私は、当時、家の軒先をふかく伸ばしてつくつた物置のようなところを借りていました。

[以下ページ欠落]

＊ミレー　ジャン＝フランソワ・ミレー。フランスの画家